

ICT を活用した保育界に対する学習支援システム －保育者養成校発の試みと課題－

The Learning Management System for Nursery Teachers using ICT. - Attempts and Tasks of Childminder Training School-

神谷 勇毅^{*1}

Yuki KAMIYA^{*1}

^{*1} 鈴鹿大学短期大学部

^{*1} Suzuka Junior College

あらまし：「保育」というキーワードを聞くと、昨今の報道などでも様々聞かれるように、人材不足、労働環境、待機児童など、ネガティブなイメージを持たせるものが先行する。一方で保育者を志し保育者養成校に入学してくる次代保育者が居ることも事実である。その者達も、次を担う保育者として勉学を積む中で、学習過程、または卒業後の様々な事象から保育者を断念する者、離職する者も出る。これは現場と養成校との意識のズレやミスマッチが原因の1つであると考え。養成校としても、保育者を志す学生の支援、教育と合わせて、職場となる保育界そのものに対し、養成校だからこそ出来る事があると筆者は考える。本稿では、養成校発の保育者学習支援システムの開発、運用試行と課題について報告する。

キーワード：幼児教育、保育者養成校、情報学、必修科目

1. はじめに

近年、頻繁に耳にする保育を取り巻く環境の厳しさについて、様々山積する諸問題に立ち向かおうと現場、行政機関などが解決に向けた施策を打ち出している^{(1),(2)}。しかし、未だ解決には至っていない。筆者の在籍する保育者養成校においては、次代保育者である学生の教育はもちろんであるが、この問題に養成校の視点から出来る事があると考え、ICTを活用した支援に取り組んでいる。

2. 3者を結びつける支援

支援対象は、「保育者」としている。一口に保育者と言っても、立場が違う3者が見えてくる。

2.1 3つの「保育者」

筆者は、支援対象である保育者を

- ① 次代保育者
- ② 現職保育者
- ③ 潜在保育者

の3立場に分け、それぞれを独立的に支援するのでは無く、一括した支援を行う事を目的とする⁽³⁾。

次代保育者とは、保育者を志し、現在養成校で学習を積む学生を指す。現職保育者とは、園で日々子どもと向き合い、保育技術、知識を子どもへと還元する者を指す。潜在保育者とは、保育士証など、保育に関連する資格の取得はしたものの、違う道で就職した者、過去に幼児教育現場に身を置いたが、様々な理由から現在は現場から離れている者を指す。

2.2 3者それぞれが抱える問題

次代保育者である学生が抱える問題として、学内での学習だけでは現場のイメージが掴みにくい、実習という機会もあるが、その期間は僅か数日であり、緊張も相まって、実習機会だけで保育の全てを理解

出来ない、実習先である園の情報不足からミスマッチが生じ、結果的に潜在保育者予備軍となる者も少なからず出る、といった事が挙げられる。

現職保育者が抱える問題として、日々の業務に追われ、自身のスキルアップの機会を作る事が難しい、自身が免許を取得してから長い年月が経ち、現在の養成校で養成されてくる保育者とのコミュニケーションの取り方が難しい、特に私立園では、他園との交流も少なく、保育者同士の交流が同級生程度であり、世代を超えた同業者の繋がりが希薄である⁽⁴⁾。

潜在保育者の抱える問題として、復職意欲はあるが、復職にあたって必要な情報が散在しているため情報を探すのに手間も時間もかかる。保育園、幼稚園などのWebは、欲しい情報が全て掲載されている保証は無く、時に情報が古いものが掲載されたままであり、結局電話に頼らざるを得ない、復職意欲はあるが、長年現場を離れているため、学び直しをしたいが機会が無い、という事が挙げられる。

2.3 解決に向けて

前節で示した、それぞれの保育者が抱える問題について、筆者が提唱する「3者を結び付けた支援」を行うことで、その解決に広がりが出る。次代保育者が抱える「現場の情報不足」、潜在保育者が抱える「欲しい情報の入手」について、現職保育者からの情報提供で解決の道が開ける。現職保育者が抱える「スキルアップの機会」、潜在保育者が抱える「学び直し」については、正に今、学びの途上である次代保育者からの情報提供で、最新の学習情報が入手できる。また、この次代保育者からの情報提供は、学ぶ者が教える立場に回ることによって生じる新たな学習効果にも期待出来る。

この環境を整えるため、筆者はLMSを活用した保育者支援システムの開発、運用に取り組んでいる。

3. 三重保育パーク

保育者を支援するにあたり、特に行政機関では人材不足と言われる現職保育者の充足を目的として、潜在保育者を対象とした「カムバックセミナー」を開催するものを良く目にする。一方で、地理的・時間的な要因からカムバックセミナーへの参加が難しい者も居り、全体的に復職にまで結びつく機会は少ない様である。また、現職保育者の離職を防ぐために、同じく行政主体となつての新人保育者研修事業なども開催されるが、参加者からは、先の潜在保育者同様、地理的・時間的な要因で参加し辛いという声も聞かれる。地理的・時間的な制約を取り除く事は ICT 活用で得意とするところである。確かに、一堂に会し、対面での研修には多大なメリットがある。しかし現状、意欲はあっても地理的・時間的に制約がかかり、支援し切れない人材が居る事も事実である。そのため、養成校発での保育者支援システム「三重保育パーク」を立ち上げ、支援に挑戦している⁽⁵⁾。保育者養成校がこれまでの人材育成において、蓄積してきた“養成知”を発信すると共に、保育現場から情報を集め、広く発信をする場である。



図1 保育者支援ポータルサイト

4. 運用課題

三重保育パークが発信する情報において、特に現場の園から提供される情報は、園の協力無しには成り立たない。園からの情報を可能な限り集め、発信したいと思うが、一方で園側としては、外に出したく無い情報があることも事実である。運用開始から現在まで、三重保育パークが発信する情報は、養成校がこれまでの人材育成において蓄積してきた蓄積知の発信が中心となっている。そのため、現在のところの主な活用は、養成校での現在の教育内容の提供、次代保育者と現職、潜在保育者の仮想空間上での交流が主となっている。この情報発信も意義があることだと自負している。合わせて本システムの理念を理解し、協力しても良い、情報提供しても良いと思う私立、公立幼稚園、保育園、認定こども園からの情報提供も得ているが、情報提供が未だ不足している事実は否めない。地道な活動を通して徐々に協力園が増えてきており、継続した活動の重要性を認識している。対象者の支援という面では、学生ら

が実習に出る前に、事前情報として園の傾向を掴むという点では有益に働く事例が確認出来ている。また、現職保育者から、手軽に活用が出来る、現職者同士、悩みや意見交換が出来ることがありがたい、養成校の「今」を知る事が出来る、次を担う保育者養成に実習以外で関わる機会があることは貴重である、などの意見が寄せられている。残念ながら、潜在保育者に対する効果は、まだ十分な事例が上がっていないため引き続き効果を探っていききたい。

5. まとめ

本稿は、保育者養成校が取り組む、新たな保育者支援の事例を報告した。報道などで様々聞かれる保育の現場、環境の実態がある一方で、保育者を志し養成校に入学してくる次代保育者、現場で日々奮闘する現職保育者、現在は現場を離れているが、機会があれば復職をしたいと思う潜在保育者が居る。この3者に対し、3者を結び付けて支援する試みはこれまで見られなかった。3者を結びつけることで、支援対象のそれぞれが、各自の立場を生かし、交流することで生じる新たな保育者支援の環境づくりを狙い活動を行った。養成校としても、次代保育者の養成に終始するのではなく、教育で培い蓄積されている養成校の知を広く社会へと還元していくべきだと考える。その意味で、本研究は、養成校の新たな在り方を指し示す指標となる。

参考文献

- (1) 松田典子：“保育士のキャリア形成についての考察”，日本家政学会研究発表要旨集, 67(0), pp.75 (2015)
- (2) 吾田富士子：“保育の質を規定する職場環境と環境改善のための研修のあり方：環境改善の試行と研修による主任保育士の意識の変化から”，藤女子大学人間生活学部紀要, 54, pp.69-79 (2017)
- (3) 神谷勇毅：“三重保育パーク設置に向けた展望～ICTを活用した保育士環境支援～”，日本教育工学会研究報告集 JSET16-1, pp.383-386 (2016)
- (4) 倉石哲也，寺井朋子，橋詰啓子：“保育士の支援に関する実践的取り組み：「保育士のための元気アップ勉強会」の内容と評価”，臨床教育学研究 (19), pp.43-61 (2013)
- (5) 神谷勇毅，江藤明美，小島佳子：“養成校発保育者支援システムの開発と活用”，教育システム情報学会 JSiSE Technical Report Vol.31, No.6 (2017-3), pp.145-148 (2017)